日本統治末期，台湾先住民の島内軍事動員
── 特設警備第517大隊の分析

At the end of WWII, Indigenous Peoples of Taiwan and Mobilization Related to
— 'Absence name lists' of unit 517

小　野　純　子

Junko ONO

はじめに

本研究は，大戦末期から終戦に至る台湾島内の日本植民地防衛体制の中で先住民族が担っていた役割について検討するものである[1)]。太平洋戦争時の台湾においては先住民の軍事動員が行われていた。上記については，南洋地域での戦闘を目的に組成された「高砂義勇隊[2)]」が良く知られ，台湾軍事史研究においては，島外，特に南洋地域における戦場動員が注目されていたため，多くの研究が行われている。しかし，先住民が戦争動員されたのは，「高砂義勇隊」だけではない。台湾島内に残った先住民は，終戦間際，「特設警備部隊」として戦争に関与していくことになる。

筆者はこれまでの『留守名簿』[3)] を中心とした研究の中で，大戦末期に先住民が台湾島内で集中的に動員されている部隊「高砂特設警備部隊」が複数存在したことを確認し，特設警備部隊第513大隊（以下，第513大隊）と特設警備部隊第514大隊（以下，第514大隊）の『留守名簿』の整理と分析を行った（詳細は第１章で整理）[4)]。本稿は，上記の第513大隊，第514大隊の分析に続いて，特設警備部隊第517大隊（以下，第517大隊）の『留守名簿』整理及び分析を行う。

『第10方面軍関係戦史資料』の記載によれば，「高砂特設警備部隊」は，６大隊が編成されていた（【表１】）。加えて筆者の『留守名簿』調査で，それらが特設警備第513～517

1)　本研究においては第１弾，第２弾（４）を参照）と同様に『留守名簿』，「軍属」，「軍人」など多くの用語が使用されている。用語に関しては，近藤正巳『総力戦と台湾』（刀水書房，1996年），防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　陸海軍年表　付兵語・用語の解説』（朝雲新聞社，1974年），「日本統治末期，台湾の防衛体制と『留守名簿』―第40軍と嘉義を中心として」（博士論文），（名古屋市立大学，2019）を参照されたい。

2)　高砂義勇隊の研究に関しては，菊池一隆「台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争―高砂義勇隊の実態と歴史的位置―」（『現代中国研究』第33号，2013年，特集：日中戦争における東アジア），菊池一隆『日本軍ゲリラ高砂義勇隊　台湾原住・民の太平洋戦争』（平凡社，2018年）が詳しい。

3)　『留守名簿』とは，外征部隊所属者の現状と留守関係を明らかにした特定歴史公文書である。台湾関係の『留守名簿』は，概ね2013年までに厚生労働省から国立公文書館へと移管された。

4)　小野純子「台湾原住民と動員：『特設警備部隊第513大隊台湾第13887部隊　留守名簿』に関して」，名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，34巻，103-113頁で特設警備部隊第513大隊及び小野純子「日本統治末期，台湾先住民の島内軍事動員－特設警備部隊第514大隊の分析」，金城学院大学論集（人文科学編），18巻２号，26-42頁，2022年

【表１　高砂特設警備部隊整理表[5)]】

部隊名	編成地	編成日	人数	備考/管轄地域	分析
第513大隊 台湾第13887部	新竹	S20.4.9	620名[6)]	令甲63号 新竹周辺	済
第514大隊 台湾第13888部隊	台中	S20.4.9	600名[7)]	令甲63号 台中周辺	済
第515大隊 台湾第13889部隊	高雄	S20.4.9		令甲63号 旗山郡で警備と高砂族（250名）の訓練に従事[8)]	未済
第516大隊 台湾第13890部隊		S20.4.9		令甲63号 花蓮港周辺	未済
第517大隊 台湾第13891部隊	花蓮港	S20.4.9		令甲96号 台東周辺	本稿

（出典：小野純子「日本統治末期，台湾先住民の島内軍事動員－特設警備部隊第514大隊の分析」，金城学院大学論集（人文科学編），18巻２号，26-42頁，表１より）

大隊である可能性が高いことが判明している。『留守名簿』は名簿ごとに保存状態や収集状況が異なるため，先に第513大隊，第514大隊と整理・分析を進めた。本稿では，第513大隊，第514大隊の分析に次いで保存状態の良い第517大隊の名簿を取り上げることとした。

大戦末期の台湾島内の戦争動員に関しては，先住民に限らず史料が乏しいため，積極的に研究がされてこなかった。さらには「高砂特設警備部隊」に関して，その存在も明らかにされていなかった。そのため部隊を取り上げた先行研究は乏しく，陸軍一般史料及び『留守名簿』の整理・分析が部隊解明の一助となる。以上，本稿は，第517大隊の『留守名簿』を整理し，分析を行うものであり，本研究は，植民地動員体制の最終鏡面を先住民動員から検討する研究の一部である。

１．台湾島内動員と先住民－第513大隊と第514大隊

本研究においては，すでに特設警備第513大隊と特設警備第514大隊『留守名簿』の整理と分析が完了している。本章では，これまでの調査結果を整理する。上記，【表１】でまとめたように，筆者は，陸軍一般史料から「高砂特設警備隊」の存在を６部隊，確認した。『留守名簿』に記載された在留地住所や姓名などからうち５大隊[9)]は，特設警備第513，514，515，516，517大隊であることが推察される[10)]。【表２】で第513大隊と第514大隊を整理する。

第513大隊，514大隊共に，約600名の部隊である。『留守名簿』からその人員は，編成地に居住する高砂族によって編成されていた。召集された人々の年齢は，14歳～40歳過

5)　JACAR：Ref.C12120981200，C12120981300，C12120981400，C12122499300（S41）C12122495200（S38），C12122495300（S38），各部隊『留守名簿』より整理。

6)　小野純子「台湾原住民と動員：『特設警備部隊第513大隊台湾第13887部隊　留守名簿に関して」，『人間文化研究』，名古屋市立大学，2020年でその詳細な人数について記述。

7)　詳細は次節で述べている。

8)　Ref. C12122499300「南方．支那．台湾方面陸上部隊略歴（航空．船舶部隊を除く）第２回追録」18．台湾方面部隊（2）に「高雄州旗山郡に在りて，警備並びに高砂族（250名）の訓練に従事」と記載されている。

9)　『第10方面軍関係戦史資料』には，高砂特設警備部隊は６部隊に分かれていたと記載があるが，『留守名簿』から判断ができるのは５部隊である。

10)　『第10方面軍関係戦史資料』（防衛省防衛研究所）及び『留守名簿』。

【表２　第513大隊及び第514大隊整理表[11]】

	第513大隊	第514大隊
総数	620名 日本人：87名，高砂族：533名	600名 日本人：52名，高砂族：548名
編成日	1945年４月20日	1945年４月20日
編成地	新竹州	台中州，台南州（嘉義）
先住民族	タイヤル族，サイシャット族	ブヌン族，ツゥオ族，タイヤル族
居住地[12]	新竹州新竹郡（９名） 新竹州大渓郡（182名） 新竹州竹東郡（190名） 新竹州竹南郡（52名） 新竹州大湖郡（104名）	台中州新高郡（193名） 台中州能高郡（240名） 台中州東勢郡（53名） 日本または不明（14名） 台南州嘉義郡（48名）
年齢	14～40歳過ぎ	15～40歳過ぎ
役種	1924年以前生まれ：現歩二 1925年以降生まれ：二國歩二	現歩二
日本人	石川県，富山県出身者多数	日本全国，台湾島内
年齢	20～40歳過ぎ	20代半ば～40歳過ぎ
役種	高砂族に比べると高位	現歩見士（現役歩兵見習士官）が多い。高砂族に比べると高位
備考	終戦後，高砂族は現地召集解除，日本人はほとんどが第９師団またはその隷下部隊に転属	終戦後，高砂族は現地召集解除，日本人は第71師団またはその隷下部隊に転属する者も多い
	高砂特設警備第２大隊	高砂特設警備第３大隊または第４大隊

ぎで，『留守名簿』を分析すると「年齢に関係のない」，「地域」，「蕃社」ごとの召集が行われていたことが推察される。高砂特設警備部隊には，14歳の中等在学者相当の年齢の者もいた。戦時中の召集年齢に関しては，終戦間際に何度も法令が改正されており，様々な議論がある。

次に第513大隊と第514大隊の高砂族の役種とその基準を考察すると，高砂特設警備部隊に関しては，第513大隊は年齢により「現歩二」（現役歩兵二等兵）と「二國歩二」（第二国民兵役歩兵二等兵）の基準があり，第514大隊は全員が「現歩二」（現役歩兵二等兵）の役種であり，部隊によって，その「年齢」及び「役種」の基準が曖昧である。

また，第513大隊は新竹周辺の防衛を統括していた第９師団，第514大隊は台中から嘉義周辺の防衛を統括していた第71師団という第10方面軍（台湾軍）の中心師団がその指揮をとっていた可能性が考えられる。

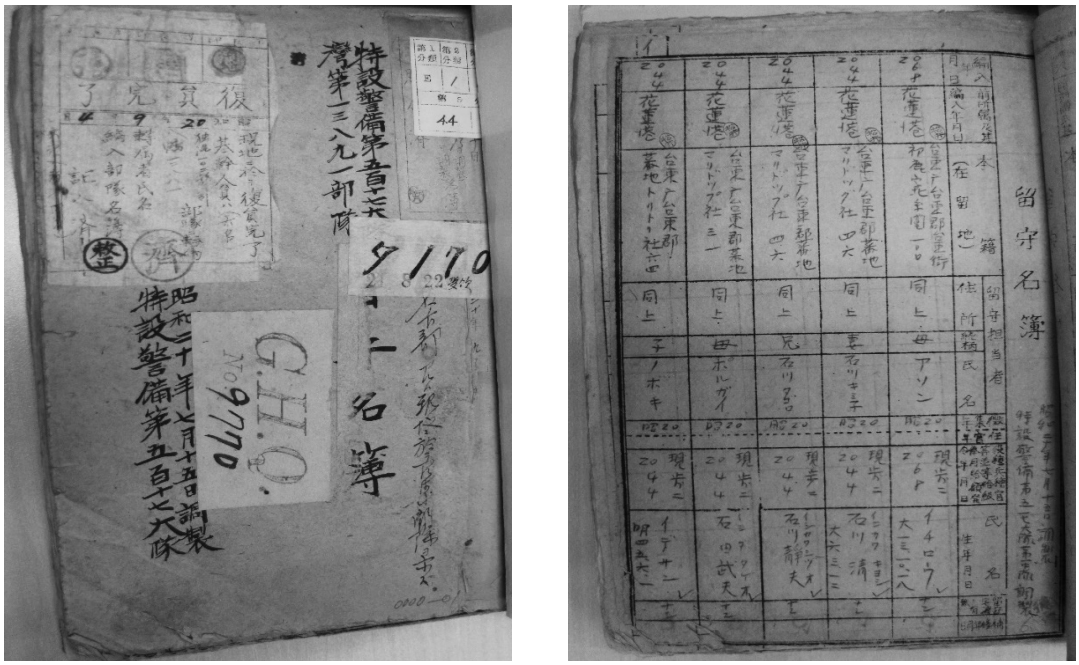
２.『特設警備部隊第517大隊　台湾第13891部隊　留守名簿』分析

【図１】は，第517大隊台湾第13891部隊『留守名簿』の表紙と名簿の１頁である。第517大隊は，台湾第13891部隊とも呼ばれている。本部隊の名簿は，1945年７月15日に作成された。表紙の記載によれば，部隊は，1945年９

[11] 小野純子「台湾原住民と動員：『特設警備部隊第513大隊台湾第13887部隊　留守名簿』に関して」，名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，34巻，103-113頁，2020年，小野純子「日本統治末期，台湾先住民の島内軍事動員－特設警備部隊第514大隊の分析」，金城学院大学論集（人文科学編），18巻２号，26-42頁，2022年より筆者作成。

[12] 居住地の人数には，台湾在住の日本人も含まれる。

【図１　『特設警備部隊第517大隊　台湾第13891部隊　留守名簿』】



（出典：『特設警備部隊第517大隊　台湾第13891部隊　留守名簿』，国立公文書館にて筆者撮影）

月４日，現地（台湾）において，その人員は復員が完了し，基幹人員に関しては独立混成第102旅団[13] に転属した。

台湾で編成された部隊に関しては，戦後，厚生省援護局によって『南方．支那．台湾．朝鮮（南鮮）方面　陸上部隊略歴（航空．船舶部隊を除く）』が第１回～第４回追録まで作成された。その中に，「台湾方面部隊」の略歴が記されている。先に整理した第514大隊は「台湾方面部隊」に部隊略歴が残されている。第517大隊に関しても，アジア歴史資料センターによれば，第４回追録に記されている[14] とされているが，筆者のこれまでの調査では見つからない。【図２】は，特設警備諸部隊（2）に綴られている一部である。

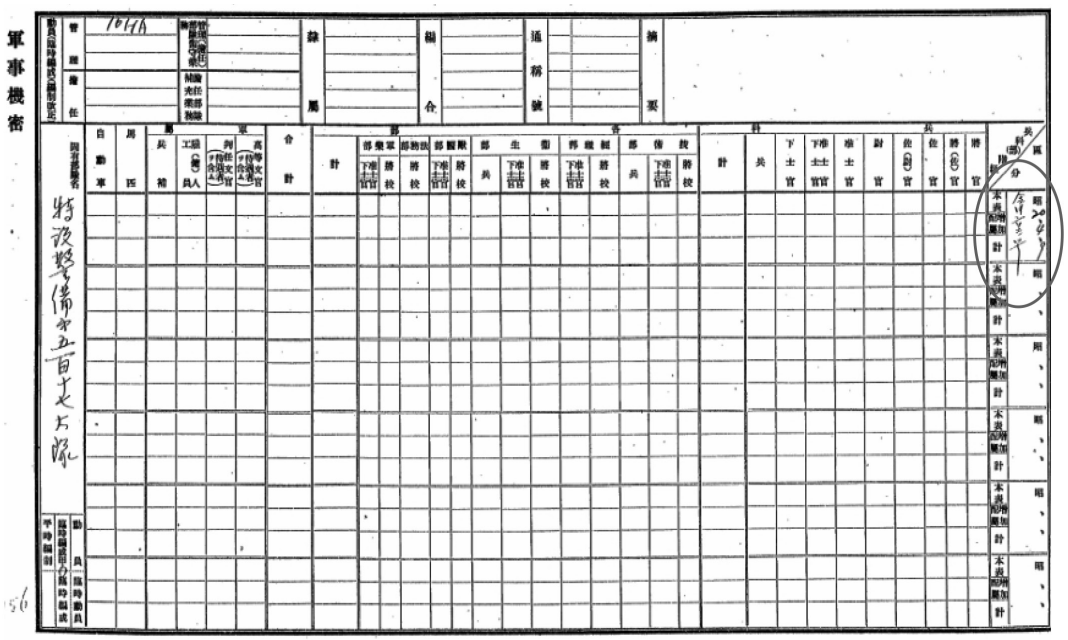
【図２】陸軍一般史料，特設警備部隊人員表を参照すると第517大隊は，1945年４月９日に編成され，第10方面軍の管理下におかれた[15] ことがわかるが，現存する陸軍一般史料

[13] 1945年２月，花蓮港で臨時編成された部隊である。主に，花蓮港地区と台東地区の防衛にあたっていた。戦時中は，空襲激化のため対空戦闘に従事し，その傍ら陣地構築を行っていた。アジ歴グロッサリー（https://www.jacar.go.jp/glossary/term/0100-0040-0090-0010-0010-0100.html）2022年８月４日閲覧。

[14] アジア歴史資料センター「15．台湾方面部隊」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122499300，南方．支那．台湾．朝鮮（南鮮）方面　陸上部隊略歴（航空．船舶部隊を除く）第４回追録（防衛省防衛研究所），「内容」欄に記載あり。https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=off&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=detail&IS_START=1&IS_NUMBER=1&IS_TAG_S18=eadid&IS_KEY_S18=M2012122713110226693　2022年８月３日閲覧。

[15] 特設警備部隊人員表は，詳細な人員数が記載されている部隊もあるが，第517大隊に関しては，その管理部隊と編成日のみの記載であった。（参照：Ref.C12120981300）

【図２　特設警備部隊　人員表】



（出典：「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12120981300，特設警備諸部隊（2）（防衛省防衛研究所）」）

では，管理部隊と編成日以外の情報は存在していない。一方で，『留守名簿』に部隊人員の詳細について記載されているため，上記『留守名簿』を整理，分析する。

先述したように第517大隊の『留守名簿』は，1945年７月15日に作成された。第517大隊の人員数は306名であった。そのうち14名が日本人であり，292名は高砂族である。（【表３】）。第517大隊の日本人に関しては，その前所属や本籍，役種（比較的高い）などから日本人であることを判断した。日本人の本籍に関しては，【表４】に整理した。

【表３　第517大隊人員数】

	日本人	高砂族
人数	14名	292名

（『留守名簿』より筆者作成）

【表４　第517大隊日本人，出身別，役種詳細】

第517大隊　日本人			
出身	人数	役種	
山口	２名	二補歩長	―
熊本	２名	予歩長	予歩兵
岐阜	２名	予歩長	豫衛軍三
大分	１名	二補歩一	予歩長
島根	１名	二補歩一	―
広島	１名	現衛一	―
愛媛	１名	二國歩一	―
沖縄	１名	予歩長	―
長崎	１名	一補伍長	―
佐賀	１名	予衛伍	―
台北	１名	予衛見士	―
計	14名		

（『留守名簿』より筆者作成）

『特設警備諸部隊（2)』によれば部隊の編成日は，1945年４月９日である。人員の編入日はまず，1945年３月25日に役種の高い日本人が集められ，1945年３月27日に31名が召集され，次いで1945年４月４日に多くの高砂族が部隊に加わったことが，第517大隊の『留守名簿』から判明した。(【表５】)。

次に【表６】に整理した役種を分析する。【表６】では，第517大隊に所属していた高砂族の役種を整理した。召集された292名の高砂族の多くは「現歩二」，現役歩兵二等兵として召集された。また，「二國歩二」，第二国民兵役歩兵二等兵も29名いた。これまでの第513大隊，第514大隊の調査結果と同様にその召集にも一定の年齢基準があったと考えられる。1924年以前に生まれた人々は現役兵として集められ，1925年以降に生まれた人々は第二国民兵役兵として集められた。

ここで以下，【表５】と【表６】の内容を整理すると，まず，1945年３月27日（「S20.3.27」）

【表５　第517大隊　編入日】

編入日	人数
S20.4. 4	191名
S20.6. 8	59名
S20.3.27	31名
S20.5.12	10名
S20.3.25	8 名
S20.7.10	2 名
S20.5.29	1 名
S20.5.21	1 名
S20.6. 1	1 名
S19.8. 9	1 名
不明	1 名
	306名

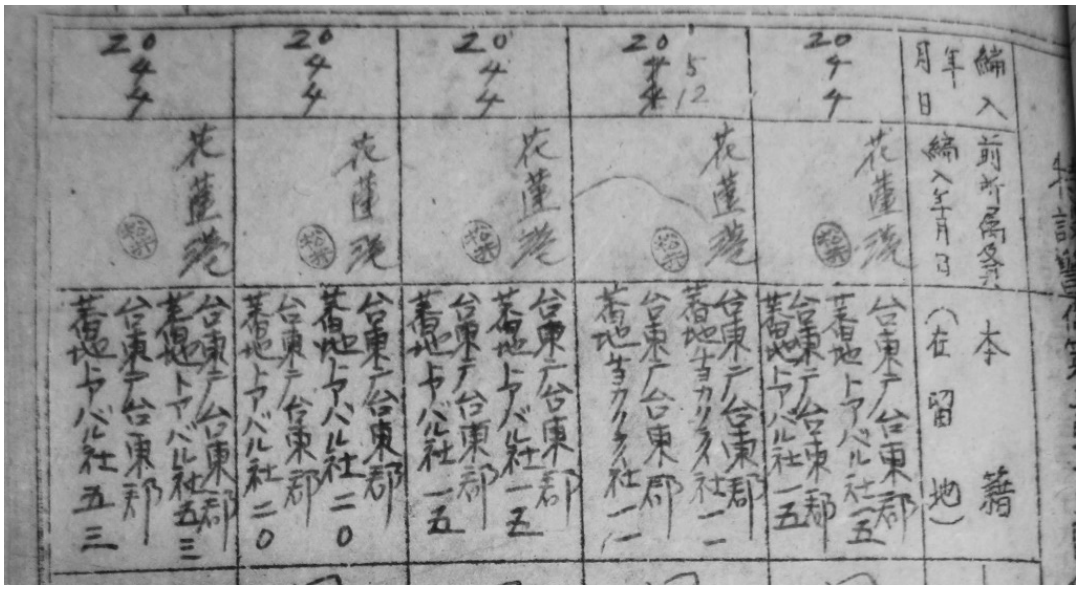
（『留守名簿』より筆者作成）

【表６　第517大隊　高砂族　役種】

	現歩二	二國歩二	不明	合計
人数	262名	29名	1 名	292名

（『留守名簿』より筆者作成）

【図３　『特設警備部隊第517大隊　台湾第13891部隊　留守名簿』】



（出典：『特設警備部隊第517大隊　台湾第13891部隊　留守名簿』，国立公文書館にて筆者撮影）

に，生年が1925年以降の人々が第二国民兵役歩兵二等兵として召集された。次いで，1945年４月４日，６月８日に部隊の多くの人員が現役歩兵二等兵として集められた。1945年３月27日以外の召集で，その召集方法に年齢や出身社別の基準はなく，一斉に召集された。

第517大隊は，『留守名簿』に記載された人々の本籍などにより，「台東庁台東郡」の人々を召集して編成した部隊であることがわかる（【図３】）。このことから，第517大隊は，高砂特設警備部隊第１～６高砂大隊のうち，特設警備部隊第５大隊もしくは第６大隊ではないかと考えられる[16]。【図３】の『留守名簿』には，前所属の箇所に「花蓮港」と記載されているが，これは，管理を示すものであると考えられる。高砂特設警備部隊第５大隊もしくは第６大隊であるとすれば，その管理は花蓮港庁の防衛を統括していた独立混成第102旅団が担当していた[17]といえる。

【表７】は第517大隊の高砂族であると考えられる人々の具体的な本籍，蕃社を整理したものである[18]。

第517大隊は，第１大隊と第２大隊の２つの大隊に分けられている（【表７】）。それは，「蕃社」ごとに分けられ，第１中隊が133名，第２中隊が159名であった。ここに集められた高砂族は，『高砂族調査書』，『高砂族の教育』，『蕃社戸口 昭和十六年十二月末日現在』からパイワン族とアミ族であると考えられる[19]。以下，【図４】，【図５】に台東庁管内図を載せる。参照されたい。

【表７　第517大隊　高砂族詳細】

花蓮港（第一中隊）		花蓮港（第一中隊）	
社名	人数	社名	人数
卑南	11名	出水坡社	６名
射馬干	４名	アロエ社	17名
北糸圞	10名	トアバル社	23名
太巴	７名	テパパオ社	７名
呂家	９名	タバカス社	11名
ビララウ社	９名	ルラクシ社	３名
大南社	29名	タリリタ社	１名
マリトッグ社	１名	トビロウ社	１名
マリトップ社	７名	トコブル社	６名
トリトリ社	５名	チヤチヤガトアン社	２名
都蘭社	１名	チヨカリライ社	４名
カラタラン社	６名	ラリパ社	10名
カアロウン社	８名	タリリク社	12名
マリブル社	３名	トビロ社	11名
パウモリ社	４名	ジヨモル社	７名
知本	11名	キリパリヤン社	７名
バジヨロ社	５名	ツダカス社	６名
アリパイ社	２名	トアカウ社	３名
カアロイン社	１名	ナポナポ社	１名
		トコゴ社	７名
		近黄	２名
		カクプラン社	２名
		ポリガット社	２名
		タイハンロク社	８名
計	133名	計	159名

（『留守名簿』より筆者作成）

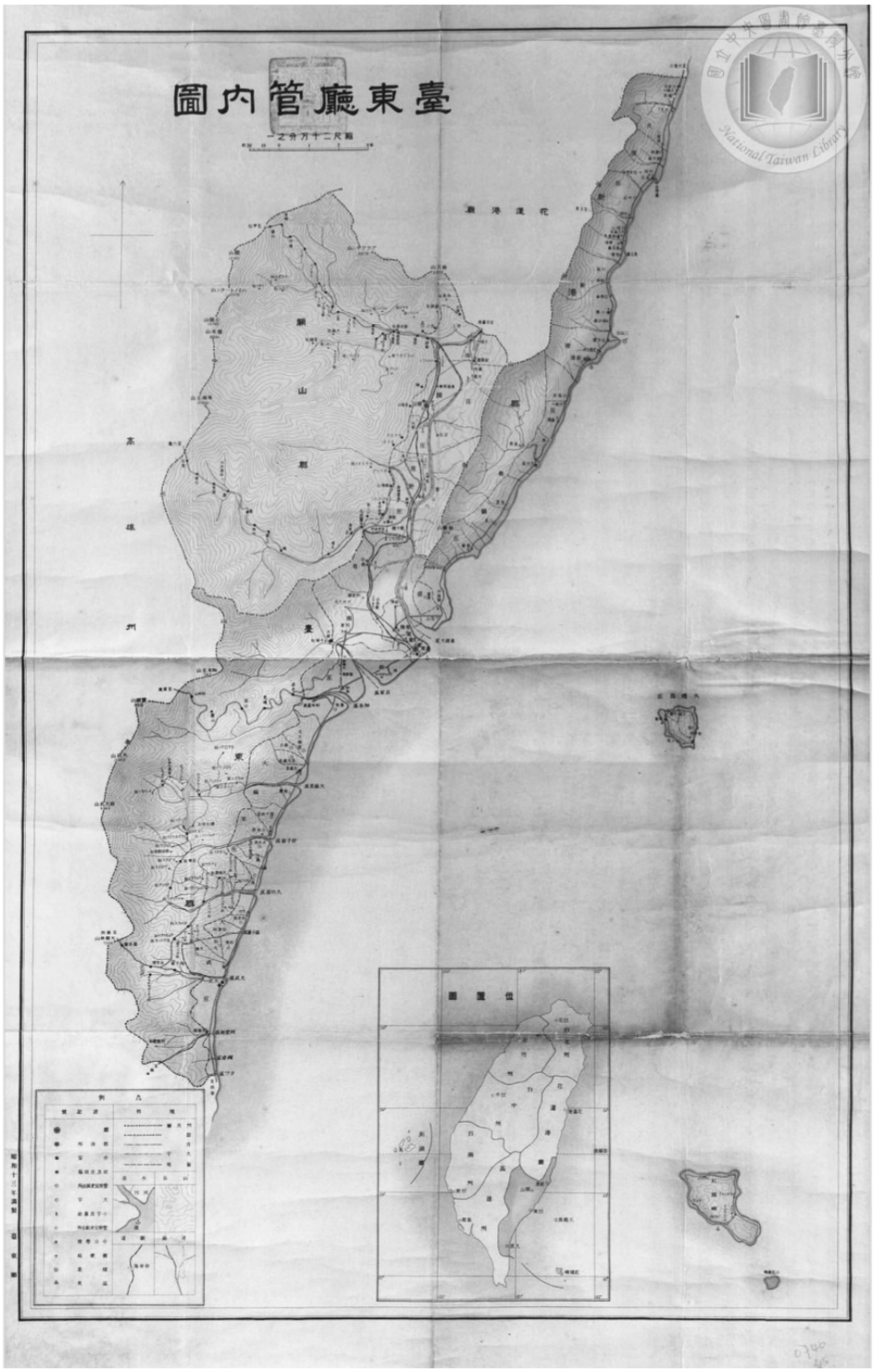
16) 小野純子「日本統治末期，台湾先住民の島内軍事動員－特設警備部隊第514大隊の分析」，金城学院大学論集（人文科学編），18巻２号，26-42頁，2022年，【図３】を参照されたい。

17) 【図３】を参照。

18) 各社の名前は，『留守名簿』より読み取ったものであり，実際の名前とは異なる可能性がある。

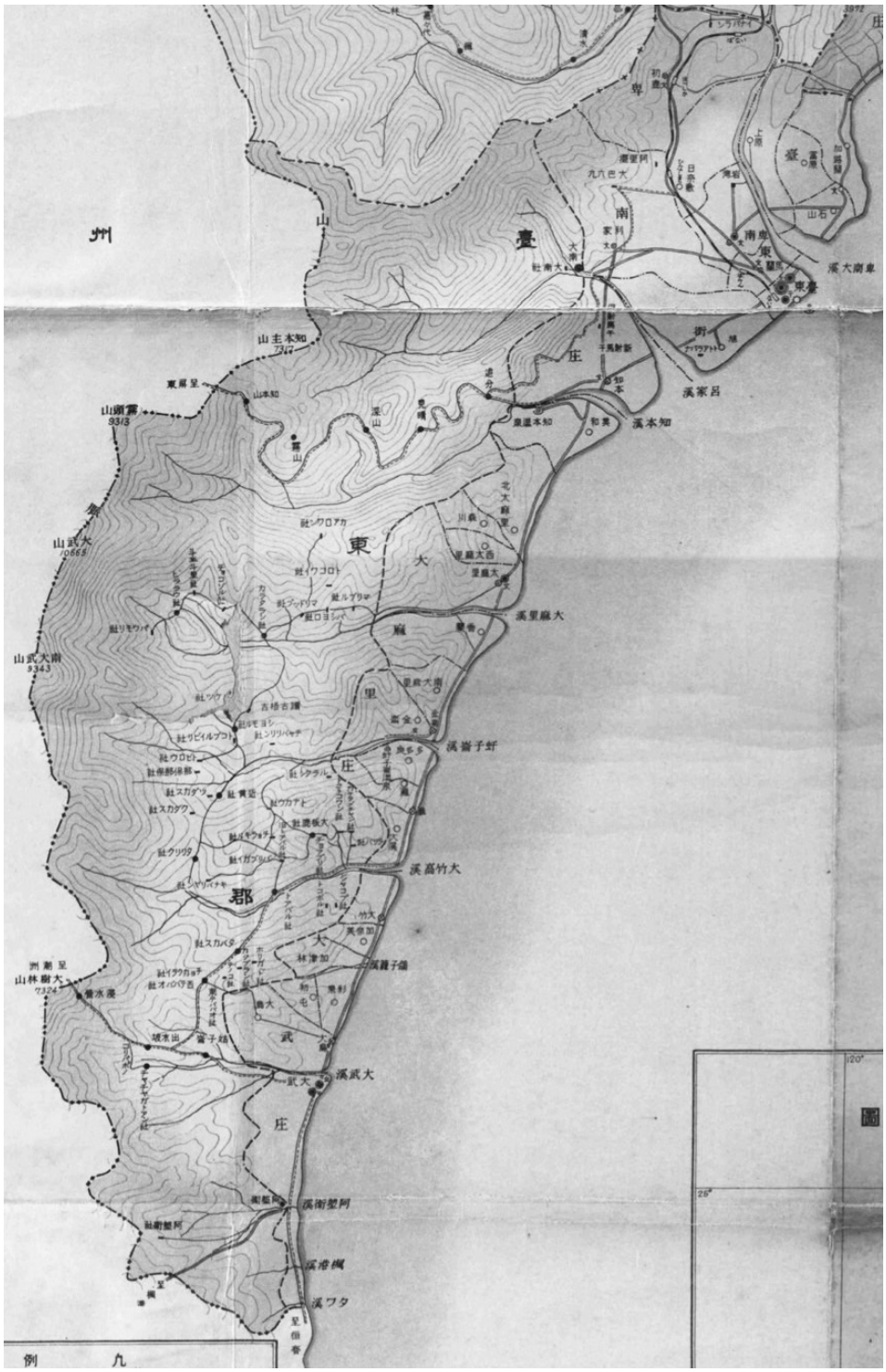
19) 1936年『高砂族調査書』（台湾総督府警務局理蕃課）第１編，26-27頁。『高砂族の教育』1944年版74-76頁，『蕃社戸口 昭和十六年十二月末日現在』（台湾総督府警務局）1942年発行を参照。大分高商・経専コレクションhttps://opac.lib.oita-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=v3search_view_main_init&block_id=296&direct_target=catdbl&direct_key=%2554%2544%2530%2530%2530%2530%2531%2531%2536%2534&lang=japanese#catdbl-TD00001164　2022年10月26日閲覧。

【図４　台東庁管内図1938年】



（出典：臺東廳管內圖，臺東臺東廳，1938年）

【図５　台東庁管内図1938年－台東庁台東郡】



（出典：臺東廳管內圖，臺東臺東廳，1938年）

おわりに

本稿は，「高砂特設警備部隊」に関して，その部隊の詳細を明らかにするために『留守名簿』の整理と分析を行ったものである。高砂族の戦争動員に関する研究は，これまで高砂義勇隊が中心に進められており，大戦末期の台湾島内での動員に関しては着目されなかった。第１章で整理したように，本研究では先に，新竹州で編成された第513大隊と台中州及び台南州で編成された第514大隊の分析を終えている。本稿は，それに続くものであり，花蓮港で編成された第517大隊に関して『留守名簿』の整理と分析を進めた。

第517大隊の『留守名簿』分析から，第517大隊は『第10方面軍関係戦史資料』で示された「高砂特設警備部隊」第５大隊また第６大隊の可能性が限りなく高いと考えられる。ただし，これまでの第513大隊，第514大隊と同様に高砂特設警備部隊第５または６大隊から第517大隊へと改編したことを示す史料はこれまでに発見できていない。

第517大隊は，『留守名簿』には「花蓮港」が編成地と記載されており，そこに集められた高砂族は「台東庁台東郡」の出身であった。以下，【表８】は，【表２】に第517大隊を加筆し作成したものである。

【表８　高砂特設警備部隊整理表】

	第513大隊	第514大隊	第517大隊
総数	620名 日本人：87名 高砂族：533名	600名 日本人：52名 高砂族：548名	306名 日本人：14名 高砂族：292名
編成日	1945年４月20日	1945年４月20日	1945年４月９日
編成地	新竹州	台中州，台南州（嘉義）	花蓮港（台東台東郡）
先住民族	タイヤル族，サイシャット族	ブヌン族，ツゥオ族，タイヤル族	パイワン族，アミ族
居住地	新竹州新竹郡（９名） 新竹州大渓郡（182名） 新竹州竹東郡（190名） 新竹州竹南郡（52名） 新竹州大湖郡（104名）	台中州新高郡（193名） 台中州能高郡（240名） 台中州東勢郡（53名） 日本または不明（14名） 台南州嘉義郡（48名）	台東町台東郡（292名）
年齢	14～40歳過ぎ	15～40歳過ぎ	16～40歳過ぎ
役種	1924年以前生まれ：現歩二 1925年以降生まれ：二國歩二	現歩二	1924年以前生まれ：現歩二 1925年以降生まれ：二國歩二
日本人	石川県，富山県出身者多数	日本全国，台湾島内	日本全国，台湾島内
年齢	20～40歳過ぎ	20代半ば～40歳過ぎ	20代半ば～40歳過ぎ
役種	高砂族に比べると高い	現歩見士（現役歩兵見習士官）が多い。高砂族に比べると高い	高砂族に比べると高い
備考	終戦後，高砂族は現地召集解除，日本人はほとんどが第９師団またはその隷下部隊に転属	終戦後，高砂族は現地召集解除，日本人は第71師団またはその隷下部隊に転属する者も多い。	終戦後，高砂族は現地召集，日本人は独立混成第102旅団転属または現地召集解除。
	高砂特設警備第２大隊	高砂特設警備第３大隊または第４大隊	高砂特設警備第５大隊または第６大隊

【表８】から，まず，第517大隊はその他２部隊に比べて人員数が少ない。しかし『高砂族調査書』（第１編）によると，1936年の時点では，新竹州（第513大隊），台中州（第

514大隊）に比べて，台東庁の先住民戸口数は倍である。

次に第517大隊の召集方法や年齢に関しては，第513大隊と同様に1924年～1925年を境に年齢を基準として「役種」が決められている。召集方法は，他２部隊とは異なり，1925年以降に生まれた「第二国民兵役歩兵二等兵」は1945年３月27日に先に召集が行われている。台湾島内全体では，1945年３月20日「学徒特設警備部隊」の１回目の召集が行われており，年齢から考察するとその影響を受けていると考えられる。

第517大隊の編成は，独立混成第102旅団の指揮下によって行われたと推察される。これまでに高砂特設警備部隊６部隊のうち３部隊の調査を行ったが『留守名簿』に記載された内容などから，３部隊は，それぞれ編成地を統括している大規模部隊（師団または独立混成旅団）の指揮下で編成が行われていたと推察できる。

本稿で議論した高砂特設警備部隊の人員は，そのほとんどが「現役歩兵二等兵」または「第二国民兵役歩兵二等兵」である。彼らは，高砂義勇隊とは異なる存在である。１部隊の人数は部隊ごとに異なるが，第513大隊は約600名，第514大隊が600名，第517大隊が約300名であり，同様の部隊が他に３個編成されていた。以上のことから，高砂特設警備部隊は，判明しているだけでも1000人を超す部隊である。

高砂義勇隊と比較すると，アメリカ軍の目がすでに本土に向けられている大戦末期に，高砂特設警備部隊が担っていたのは台湾島内での陣地構築という目立たない作業であったこと，大戦末期の混乱の中で編成されたことから史料が乏しく，また人々の記憶にも残っていないことから「口述記録」の中でも彼らの存在は確認できていない。

本稿の内容は，『留守名簿』の整理と分析に留まっており，具体的な蕃社ごとの整理と戸籍史料などとの結び付けまでは研究が及んでいない。今後の課題は，『留守名簿』をこれまで整理した部隊に対する詳細な動員形態の調査及び，『留守名簿』の整理・分析が済んでいない部隊（特設警備部隊第515，516大隊など）の調査である。

【付記】本稿は，2020-2023年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究・課題番号20K13202・課題名「日本統治最末期，台湾先住民の島内軍事動員―『留守名簿』を手掛かりとして―」（研究代表者 小野純子）による成果の一部である。